

英語教育の

「常識」を検証する

文学部教授

小田 眞幸

◎応用言語学と英語教育

最近英語教育をめぐる様々な話題がマスコミを賑わしています。「大学入試へのTOEFLの利用」「小学校における『英語』の教科化」など、いずれも自由民主党の「教育再生実行本部」による様々な提言と関連しているもので、次々に出される施策と、マスメディアが伝える断片的な情報に多くの国民が翻弄されているという印象です。私の研究分野である応用言語学は、一言で言えば「言語についての理論的な研究の成果をもとに、日常生活の中で起こる様々な問題の解決策を探る」というものです。「解決すべき問題」は非常に多義にわたりますが、その中で最も研究対象とされているものが英語を含む外国語教育に関するテーマです。

◎イメージ先行の英語教育

筆者が最近行ってきた研究の中に、「日本の学校教育の中で教えるべき英語はど

のようなものか」ということについての議論の「批判的ディスコース分析」(Critical Discourse Analysis) があります。一言で言えば英語教育に関して「一般的に当たり前だと思われること」を再検証しようというものです。毎年文学部の1年生の授業で、学生がそれまでに受けてきた英語教育についていくつかの質問をします。その後クラスでディスカッションを行うのですが、「大学4年間でどのような英語力をつけて行きたいか」という質問に対して、ここ数年学生から寄せられる回答は「ネイティブ・スピーカーと会話ができるようにしたい」「ネイティブ・スピーカーと触れることによって英語だけではなく国際感覚を学びたい」など、いわゆる「ネイティブ・スピーカー」を意識したものが多くなっていることに気づきます。「ネイティブ・スピーカー」とは従来英語に限らず、ある言語の母語話者、すなわちその言語を生まれた時から継続的に使用している人を指しますが、多くの学生にとっては「英語」の母語話者だけを意味し、彼ら自身の多くが日本語の「ネイティブ・スピーカー」であることさえ忘れてしまっているのです。しかも多くの場合、彼らがイメージをする

ネイティブ・スピーカーとは欧米系の白人であることもわかりました。

以前、ミャンマーの活動家アウンサン・スーチーさんの演説を片方のグループには音声だけ、もう片方のグループには映像を見せながら聞かせて、様々な質問をしました。そして最後に彼女の話を英語がわかりやすかったかどうかを記述させました。本来映像を伴った方がわかりやすいはずなのですが、スーチーさんであることを認識していなかった学生の間に「英語に訛があった」というような類のコメントが目立ちました。つまり彼らは実際に音を聞いているのではなく「アジア系」の顔を見るだけで、このような偏見をもってしまっているでしょう。

本来外国語教育は、その言語を学ぶことにより相手をより深く理解し、世界平和に貢献することであると思います。残念ながら英語教育に関して言えば、その目的はあまり達成されていないようです。

◎どんな英語を教えるべきか

私たちの多くは英語を「国際共通語」という認識をしています。世界で最も使用者の多い言語は中国語です。そして調査によって多少のばらつきはあるもの

の、母語として英語を使用する人は、すなわち「ネイティブ・スピーカー」は数の上では中国語の母語話者の3分の1から半分であると言われています (Graddol 1996 参照)。英語が他の主要言語と最も異なるのは、たとえばシンガポールやフィリピンのような多言語国家で「第二言語」として日常使用されているケース、そして日本や中国などの人が対外的なコミュニケーションのために「外国語」として日常使用するケースが多いことです。その比率は母語話者を1とすると、第二言語としての使用者が2、さらに外国語としての使用者も2、すなわち1対2対2になります。言い換えれば、英語を使用する機会があるとしたら、その相手がネイティブ・スピーカーであることは約20パーセントにすぎないということです。したがって、ネイティブ・スピーカーと会話することに焦点を置いた英語学修では、国際的に通用する英語が習得できないだけでなく、知らないうちに偏見や差別が植えつけられてしまうのです。

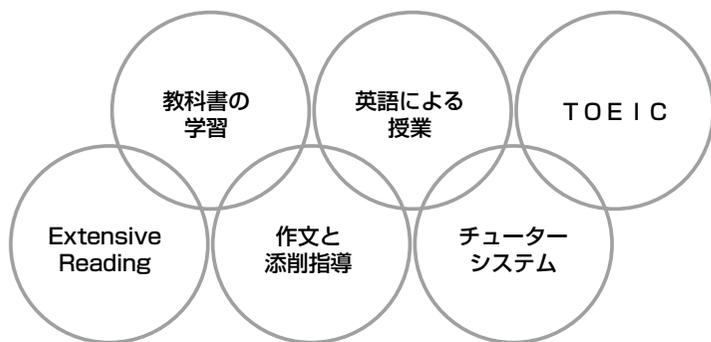
●ELF 玉川大学の挑戦

グローバル化する社会に対応するため、どの大学も英語教育の改革を打ち出して

いるのですが、未だに「国際化」「英会話」「ネイティブ・スピーカー」の3点セットを前面に打ち出している大学も多いようです。そういった中、玉川大学は本年度より国際共通語としての英語 (English as a lingua franca : ELF) プログラムを文学部比較文化学科、経営学部、リベラルアーツ学部、観光学部を導入しました。これまでにあったネイティブ・スピーカーを模倣する英語教育ではなく、英語を使

用するどんな相手とも意志疎通ができることを目標としています。そして英語教育および英語の使用者としてのエキスパートである、9つの異なった母語をもつ、11の国籍の教員が担当しており、開始後3か月ですが、国内外の英語教育関係者からも注目されています。長年の応用言語学の研究成果が玉川大学に還元できるといえることは教員としても、卒業生としても誠に嬉しいことです。

■ ELF プログラム 学修のイメージ



■ ELF の評価

